

降ひょうに対する農作物の当面の技術対策について

令和8年6月15日
川越農林振興センター

6月12日の昼すぎに埼玉県内西部地域で、強い雨とともに降ひょうや強風がありました。

そこで農作物の技術対策資料を作成しましたので、参考にしてください。

また、今後も気温の上昇にともない天候の急変が懸念されます。多目的防災網の設置、大雨後の早期排水を図るための明きよの設置等事前対策を講じてください。

野菜共通

- 1 降ひょう被害を受けた場合には、生育状況を見ながら液肥の葉面散布等を行い、草勢の回復を図る。
- 2 茎葉の損傷部からの病害の侵入を予防するため、速やかに殺菌剤を散布する。

さといも

- 1 茎葉を損傷した株は2～3週間程度で出葉するので草勢の回復を待つ。生育状況を見て土寄せ・追肥等の通常管理を行う。
- 2 適用薬剤の散布による病害の発生を予防する。過去に疫病が多発したほ場では、薬剤散布を行う。

露地なす

- 1 茎葉の一部損傷等で被害程度の小さい場合は、果実の摘除を行うと草勢が強くなることがあるので、被害果実の摘除は生育状況を見て行う。
- 2 茎の損傷や落葉等で被害程度の大きい場合は、被害果実は直ちに摘除し、株の負担を軽減する。また、損傷の軽い側枝を残して切り戻し剪定を行う。その際、摘葉は極力避けて草勢の回復を待つ。
- 3 新葉が展開し草勢の回復が見られたら、速効性肥料で窒素成分2kg/10a程度の追肥を行う。
- 4 今後気温の上昇に伴って、褐色腐敗病、灰色かび病の発生が懸念されるため、薬剤散布を行う。

ねぎ

- 1 茎葉を損傷した株は7～10日程度で出葉して回復するので、当面は、ベ

と病、黒斑病、疫病を対象とした薬剤散布を行い、追肥等は草勢の回復を見てから実施する。

- 2 軟腐病や白絹病の発生が予想されるため、ほ場に入れるようになったら、中耕または土寄せ前に薬剤を株元に散布して予防する。
- 3 一時的な浸水による湿害が心配されるほ場では、排水溝の補修などを行い、速やかな排水対策を講じる。

こまつな・ほうれんそう

- 1 茎葉の損傷が著しく、収穫、出荷が見込めないもの及び発芽間もなく今後の生育が見込めないものについては、栽培を打ち切り、播き直しを検討する。
- 2 多湿に伴って白さび病やべと病の発生が予想されるので、薬剤散布を行う。

だいこん・にんじん・かぶ

- 1 出荷間近なもので葉の損傷が軽いものは、出荷時の調整を十分に行い商品価値を落とさないようにする。
- 2 損傷が軽く、収穫までに日数を要する場合は、細菌病の発生が懸念されるので、薬剤散布を行う。

えだまめ

- 1 茎葉の損傷を受けたもので、収穫、出荷までに日数がかかる場合は、べと病、白絹病等の発生が予想されるので、薬剤散布を行う。
- 2 草勢回復を図るため、窒素成分で1kg/10a程度の追肥を行う。
- 3 連作ほ場等では、湿害に伴って白絹病の発生が懸念されるので、排水対策を講ずるとともに、薬剤を株元散布する。

スイートコーン

- 1 生育期のほ場では、必要により速効性の肥料を追肥する。
- 2 株の倒伏がひどい場合は、できる限り起こす。生育後期で起こす作業が困難な場合は、自力での立ち上がりを待つ。
- 3 病害の発生が懸念されるため、予防的に登録のある殺菌剤を散布する。
- 4 雄花抽出期～開花期となっているほ場では、アワノメイガ等の防除を徹底する。
- 5 出荷に際しては、損傷した穂が混入しないよう留意する。

果樹共通

- 1 降ひょうにより傷ついた果実は、速やかに摘果する。
- 2 主枝・亜主枝等の大枝に損傷がある場合は、トップジンMペースト等を塗布する。

なし

- 1 葉や枝が損傷している場合、黒星病や疫病の発生が懸念されるので、殺菌剤を散布する。
- 2 過去の経験から、降ひょう害の翌年は、黒星病が多発する傾向にある。計画的な殺菌剤の散布や病斑部の切除、秋防除、落葉処理など、今後の対策を徹底する。
- 3 葉や枝の損傷が激しい場合、速効性肥料を使用し、窒素成分で3kg/10a程度の追肥を行い、樹勢の回復を促進させる。

ぶどう

- 1 葉や枝が損傷している場合、べと病や晩腐病の発生が懸念されるので、殺菌剤を散布する。
- 2 枝葉の損傷に伴い、副梢が旺盛に発生した場合は、薬剤防除と摘心による管理を徹底する。